〔論文〕

東亜同文書院使用以前の御幡雅文『華語跬歩』について

愛知大学非常勤講師　石田　卓生

はじめに
1．瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』と御幡雅文混纂『華語跬歩音集』
2．御幡雅文『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版
（1）御幡雅文『華語跬歩　上編』日清貿易商会蔵版について
（2）荒尾精による京都の私塾での使用
3．井手三郎手写『華語跬歩　東中問答』
おわりに

はじめに

御幡雅文[1]が著した『華語跬歩』（かごきほ）は、上海にあった日清貿易研究所や東亜同文書院で用いられた中国語の教科書である。

この教科書は三十年あまりの長きに渡って改訂されつつ刊行されており、『華語跬歩』といっても版によって内容が大きく異なっている。

本文は、そういったさまざまな版のうち、東亜同文書院で使用される以前のものの概要や所蔵先をまとめつつ考察するものである。

『華語跬歩』については、すでに鱒沢彰夫「御幡雅文伝考」[2]が諸本を紹介し、御幡が中国語教育の経験を踏まえつつ独学に便するよう改訂し続けた足跡をあきらかにしている。しかし、参考資料の所蔵先について明記されていないものがあり原本にあたりにくい。

拙文「東亜同文書院の中国語教材：『華語萃編』以前について」[3]は『華語跬歩』諸本のなかでも東亜同文書院で使用されたと考えられるものを扱った。御幡は独学での使用を意識して中国語の音を独自のカナ表記であらわすなど『華語跬歩』の改訂を重ねたが、この教材で中国語を習得した東亜同文書院出身の教員たちが編んだ中国語教科書『華語萃編』は大きく性格を異にし、独学には全く向かない授業での使用を念頭においたものとなっており、東亜同文書院は自校での教学経験をもとに教科書の性格を変化させたことをあきらかにした。

しかし、東亜同文書院使用以前の『華語跬歩』については、前掲鱒沢「御幡雅文伝考」の記述に依拠するところが大きいにもかかわらず、そこでとりあげられた版のいくつかについては所蔵先が確認できなかったため未見のままであった。

本文では、新に実見することができた資料の所蔵先を確認しつつ、「東亜同文書院の中国語教材」では詳しくはみていなかった東亜同文書院で使用される以前の『華語跬歩』について考察する。

---

1 御幡雅文（おばた・まさぶみ　1859～1912）。肥前国長崎（現長崎県長崎市）出身。中国語通訳、教育家。東京外国語学校漢語学科を経て陸軍省派遣北京留学生。熊本鎮台、済々黌（せいせいこう）、長崎商業学校、日清貿易研究所、東亜同文書院で中国語を教えつつ、『華語跬歩』『文案啓蒙』『滬語便商』など中国語教科書を著した。三井物産会社上海支店在職中に病没。（対支功労者伝記編纂会編『対支回顧録』下巻、対支功労者伝記編纂会、1936年4月、231～232頁参照。）

2 鱒沢彰夫「御幡雅文伝考」早稲田大学中国文学会『中国文学研究』第26期、2000年。

3 石田卓生「東亜同文書院の中国語教材：『華語萃編』以前について」愛知大学現代中国学会編『中国21』Vol.32、東方書店、2009年12月。

1．瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』と御幡雅文混纂『華語跬歩音集』

瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』は、東京大学法学部附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫井手三郎文庫（以下、井手三郎文庫）に所蔵されている。

井手三郎[4]は 1887 年（明治 20）から 1890 年（明治 23）にかけて中国を遊学した経験があり、日清戦争後は中国で新聞業を営み、また東亜同文書院を運営した東亜同文会の結成に参画するなど中国に長く関わった人物である。

さて、瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』であるが、「瓊浦」（けいほ）は長崎の別称、「揮肅」（きしゅく）とは御幡雅文の号である。「未定稿」（未定稿）としているが、書物自体は印刷された一冊の和装本である。

見返りに「明治丙戌夏月」とあることから 1886 年（明治 19）、御幡が熊本鎮台にいた時期に刊行されたとみられる[5]。『華語跬歩』と名付けられた本のなかで最も古いものである。

漢字の四隅に圏点を附けて声調をあらわし、無気音は白色、有気音は黒色で示している。

本書の構成は次のようである。

目録
改正北音平仄編（24 丁）
百家姓（2 丁）
部首（1 丁）
天文類
地輿類附房屋類
時令類
身体類
飲食類
器用類附衣冠類
稱呼類附人物類
問答言語類
常言類（9 丁）
東中問答（27 丁）
全省地名

「改正北音平仄編」は漢字の中国語音をカナで表して五十音順に配列したもの、「百家姓」は姓に用いる字の一覧、「部首」は偏旁の呼称をしめしたもの、「天文類」から「問答言語類」（60 丁）までは単語や語句集、「常言類」はことわざのような通俗的な表現の例文集、「東中問答」（全 36 章）は日常の常用例文、会話例文集である。

目次にあたる「目録」には「附華語跬歩音集」と印字されており附録教材があったことがわかるが、井手三郎文庫所蔵本には附されていない。

この附録教材は御幡雅文混纂『華語跬歩音集』のことだと思われる。これを販売していた古書店によれば出版時期、出版元不明の 19 丁の和装本で、漢字を画数順に並べて字音をカナで表し、本編と同じく漢字四隅の白黒の圏点で声調、無気音と有気音をしめしている[6]。

本書収録「改正北音平仄編」や御幡雅文混纂『華語跬歩音集』がカナで中国語音をあらわしていることは興味深い。

これまで確認することができていた版では、1901 年（明治 34）の柏原文太郎編輯『華語跬歩　全』東亜同文会蔵版での発音部分「北音平仄譜」で五十音順に漢字を排列するものの字音自体についてはなにも表記されていなかったものが、1903 年（明治 36）の御幡雅文『華語跬歩　全』東亜同文会蔵版（文求堂書店）の「官話音譜」から各音節ひとつひとつをカナによってあらわすようになっていた。この変化は、御幡が東亜同文書院などでの中国語教育の経験を踏まえて独学でも使うことができる教材とするために工夫したものだと考えてきたが、実際にはそれらより古い版の『華語跬歩』を執筆する時から、すでにカナ表記していたのである。

もちろん、カナで中国語の発音を正確に

---

[4] 井手三郎（いで・さぶろう　1862～1931）。肥後国飽託郡（ほうたくぐん）中島村（現熊本県熊本市）出身。新聞家、政治家。済々黌に学び、1887 年から 3 年間中国を遊学。日清戦争時は陸軍の通訳官を務めた。1896 年福州で『閩報』（びんほう）発行、1898 年東亜同文会設立に参加、1900 年上海で『同文滬報』、1907 年には同じく上海で日本語新聞『上海日報』を発行した。1912 年から衆議院議員を 2 期務めた。（前掲『対支回顧録』下巻、529～540 頁参照。）

[5] 鱒沢彰夫「御幡雅文伝考拾遺」早稲田大学中国文学会編『中国文学研究』27 期、2001 年、21 頁。

[6] 古群洞　http://kogundou.exblog.jp/17081020/（2013 年 2 月 18 日確認。）

あらわすことはできない。しかし、カナは日本人にとってもっとも馴染みがある表音形式である。独学をするとき、カナ表記がまったくないよりは発音したい音に近づくことができるだろう。

御幡雅文は本格的な教材を著す当初から、教員が目の前にいなくても発音を学ぶことができるように配慮して発音をカナ表記する、つまり独学にも用いることができる教科書作りを目指していたのである。

なお、この瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩全』について鱒沢「御幡雅文伝考」は『華語跬歩』ではなく『華語渾歩』としている。二つの未定稿本があるのだろうか。鱒沢は『華語渾歩』とする本の所蔵先は記されておらず確認できていない。

2. 御幡雅文『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版

本書は井手三郎文庫に所蔵されている排印の線装された一冊本である。

見返しには「明治庚寅歳八月」すなわち1890年（明治23）とあるが、桂林「序」には「光緒辛卯二月」すなわち1891年（明治24）とある。鱒沢「御幡雅文伝考」も述べているように[7]、刊行されたのは1891年（明治24）中であろう。

構成は次のようである。

目録
商賈問答（27丁）
接見問答（18丁）
常言類（7丁）

巻末には「非賣品」、「桂林　校閲」、「御幡雅文　編輯」、「小林又七　印刷」とある。

本書の「常言類」は、瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』収録の「常言類」と同じものである。

本書が刊行された時期、御幡雅文は上海の日清貿易研究所（1890～1893）の中国語教員であった。『東亜先覚志士記伝』によれば「桂林」も同所の教員である[8]。

この「桂林」による御幡雅文『華語跬歩下編』日清貿易商会蔵版の「序」には次のように述べられている。

> 去年秋以本國振興商業。設貿易研究所於中華。俊秀子弟。航海來習華言。數以百計。延君秉其鐸。余邂逅申江。握手道契濶。出所輯教授之書名華語跬歩者見示。選擇精當。門徑釐然。洵堪爲初學之階梯。
>
> （昨秋、日本の商業を振興するため中国に貿易研究所が設けられ、優秀な若者が中国語を学びに海を越えてやって来た。その人数を数えると数百あまり、御幡君を招聘してその指導にあたらせた。私は上海で御幡君と思いがけず再会し、手を握り合って旧交を懐かしんだ。御幡君は教える内容をまとめた『華語跬歩』を見せてくれた。その語句の選択は適切で、わかりやすく、初学者のレベルにまことにふさわしい。）（下線は引用者。）

これによれば、本書は日清貿易研究所での中国語教育のために編まれたものである。

それにもかかわらず、なぜ日清貿易研究所ではなく「日清貿易商会蔵版」となっているのか。それは日清貿易研究所の設立者荒尾精[9]の当初の構想では、活動の主眼は教育ではなく商業にあったためだとみられる。その主体となる組織として「日清貿易商会」が考えられていたのであり、それを支える附属の人材養成部門として設立されたのが日清貿易研究所であった[10]。資金不足もあり、結果的には「日清貿易商会」構想は実現しなかったのだが、日清貿易研究所開設のための教材『華語跬歩』を準備していた段階ではまだ設立が模索されていたのであろう。

このような商業重視の姿勢は、教材の内容にも反映されており、『華語跬歩』のさまざまな版のなかで唯一「商賈問答」と商売

---

7 鱒沢、前掲「御幡雅文伝考」、42～43頁。

8 写真「日清貿易研究所卒業生」には三列目中央の荒尾精の向かって右隣に「桂林（清教）」、「御幡雅文（清教）」の二人が並んで写っている（黒龍会編『東亜先覚志士記伝』上巻、明治百年史叢書、原書房、1966年6月。1935年黒龍会出版部刊行本の復刻。）。また、「教師には御幡雅文、草場謹次郎、支那人桂某、英人アストル等を聘し」（同403頁。下線は引用者。）とも記されている。

9 荒尾精（あらお・せい　1859～1896）。尾張国出身。軍人、教育者。名は義行、後に精と改名。耕雲、東方斎と号する。陸軍教導団、陸軍士官学校（旧第5期）。1886年中国に派遣され漢口を拠点に諜報活動に従事した。1890年上海に日清貿易研究所を設立。1893年予備役。1896年台湾でペストに罹り急死した。（前掲『対支回顧録』下巻、461～496頁参照。）

10 大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史』（滬友会、1982年5月、23～24頁）参照。

を冠した内容を収録していることからもうかがうことができる。

（1）御幡雅文『華語跬歩　上編』日清貿易商会蔵版について

御幡雅文『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版の書名に下編とあることから、『華語跬歩　上編』があることが想像できる。

筆者は未見であるが、御幡雅文『華語跬歩　上編』日清貿易商会蔵版は存在したようである。

鱒沢は次のように述べている。

> ［御幡雅文は］明治23年［1890］8月には、荒尾精の日清貿易研究所（上海）の開所に備え、日清貿易商会蔵版『華語琿歩　上編』（小林又七印）を刊行し、同年9月より日清貿易研究所で教鞭をとる。翌年には「商賈問答」（下線は引用者）などを増加した『華語琿歩　下編』を刊行[11]

ここでも『華語跬歩』ではなく『華語琿歩』となっているが、井手三郎文庫所蔵の「日清貿易商会蔵版」は表紙、見返りともに『華語跬歩　下編』である。御幡の「日清貿易商会蔵版」には二つの版本があったのだろうか。鱒沢は所蔵先を記しておらず確認できていない。

さて、御幡雅文『華語跬歩　上編』日清貿易商会蔵版については、先の引用文中の「日清貿易商会蔵版『華語琿歩　上編』（小林又七印）」の箇所に次のような注が附けられている。

> 筆者［鱒沢］は『上編』の原本は未見。魚返善雄「御幡雅文の華語跬歩」（『支那語雑誌』昭和19年［1944］2月号螢雪書院刊 p. p.（ママ）27-28所載）による。小林又七は軍用書印刷を引き受けた印刷業者。「続散語」を増加、「東中問答」を「家常問答」と改題するが、内容は同じ。[12]

また同引用文中の「『華語琿歩　下編』」については次ぎの注が附いている。

> 『下編』には「接見問答」も増加している。なお、「商賈問答」はこの版にのみ収載。[13]

これらをまとめると、古い版（瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』）の「東中問答」を「家常問答」と改題し、「続散語」をくわえたものが『上編』となる。この『上編』に「接見問答」と「商賈問答」をくわえたものが『下編』であると読むことができる。

しかし、井手三郎文庫所蔵の御幡雅文『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版をみるに、この説明には二つの問題がある。

『上編』について、古い版に「続散語」を足すといっても、先行する版である瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』には「散語」という部分がないのである。もともとないものについて、いきなり「続」となるだろうか。もっとも、「続散語」を前版の内容に加えたという鱒沢の説明は魚返の記述に依拠したものであり彼自身も原本はみておらず、さらに筆者は魚返の一文も未見であるため詳細の確認ができていない。

『下編』については、井手三郎文庫所蔵御幡雅文『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版は上掲したように「商賈問答」「接見問答」「常言類」の3編しか収録しておらず、鱒沢が述べるような『上編』に内容を加えたものではない。

もっとも、鱒沢が未定稿、日清貿易商会蔵版をともに『華語琿歩』としていることから、井手三郎文庫所蔵本とは異なる版が存在する可能性もある。しかし、『上編』の増訂本が『下編』となるのは不自然ではないだろうか。『下編』は『上編』の続編となるのが一般的であろう。

御幡雅文『華語跬歩　上編』日清貿易商会蔵版がどのようなものであったのかについては、拙文「東亜同文書院の中国語教材」でも述べたが、柏原文太郎編輯『華語跬歩全』東亜同文会蔵版の内容と同じものであると可能性が高い。

柏原文太郎編輯『華語跬歩　全』東亜同文会蔵版は、一巻本であるにもかかわらず目次には「上編」と記されている。しかし、標題に「全」とあるように、そもそも「下編」などなく、この目次の「上編」の語は意味をなさない。

---

[11] 鱒沢、前掲「御幡雅文伝考」、32頁。［　］内は引用者。

[12] 同42頁。［　］内は引用者。

[13] 同43頁。

また、柏原文太郎編輯『華語跬歩　全』東亜同文会蔵版は『華語跬歩』であるにもかかわらず、編輯者として東亜同文会の幹部である柏原文太郎[14]の名があげられているのみで、著者である御幡雅文の名は記されていない。これは東亜同文会が東亜同文書院を設立する際、使用する中国語教材として柏原が既存の『華語跬歩』を「編輯」して刊行したためではないだろうか。御幡は後に東亜同文書院で教鞭をとるが、開校準備時期や開校当初、この学校と関係していないようである。著者名がなく編輯者名しかあげられていないのも、そのためであろう。

以上から柏原が中国語教科書を編輯した際に種本となったのが御幡雅文『華語跬歩上編』日清貿易商会蔵版であり、一巻本として刊行したにもかかわらず種本の目次にあった「上編」の語が紛れたと推測する。

参考として柏原文太郎編輯『華語跬歩全』東亜同文会蔵版の構成をあげる。

北音平仄譜
百家姓（2 丁）
天文類
地輿類
房屋類
時令類
水火類
呼称類
舗店類
身体類
飲食類
傢伙類付衣冠類
禽獣類付昆虫類
葯材類
疾病類
貨物類
顔色類
散語類
続散語類（45 丁）
家常問答　全 36 章（28 丁）

井手三郎文庫所蔵の御幡雅文『華語跬歩下編』日清貿易商会蔵版がやや難解内容な会話例文集であるのに対して、柏原文太郎編輯『華語跬歩　全』東亜同文会蔵版は 6 割ほどが発音や単語、語句だけという入門程度を想定していると思われる内容であり、これを『上編』であったとすると、続編として会話例文集である『下編』へという段階的な学習を想定することができる。

（2）荒尾精による京都の私塾での使用

御幡雅文『華語跬歩』日清貿易商会蔵版は日清貿易研究所の教科書として編まれたものだが、研究所の外でも使用されたようである。

井手三郎文庫所蔵の本書の裏表紙に「宮坂九郎[15]」という筆跡があることから、これはもともと彼が用いたものであるとみられる。

本書は上掲したように「非賈品」である。日清貿易研究所の関係者しか入手できないものだと思われるが、署名した宮坂自身は研究所の学生ではなく、研究所が上海にあった時期は日本にいた。そもそも彼が海を渡るのは 1895 年（明治 28）の台湾行きがはじめてである。

では、なぜ日清貿易研究所に入っていない宮坂が御幡雅文『華語跬歩』日清貿易商会蔵版である本書に触れることができたのだろうか。

ことさら中国について学んではいなかった宮坂が中国語を学びはじめたことについて『続対支回顧録』宮坂九郎の解説には次

---

[14] 柏原文太郎（かしわばら・ぶんたろう　1869～1936）下総国下埴生郡（しもはぶぐん）成田村（現千葉県成田市）出身。政治家、教育家。東京専門学校に学ぶ。早稲田大学評議員。東亜同文会結成に参加し幹部として実務や東京同文書院運営を担当。また目白中学校（現中央大学附属高等学校）の経営、同文会による天津の中日学院、漢口の江漢中学堂設立に尽力した。1912 年（明治 45）衆議院議員選挙当選。

[15] 宮坂九郎（1875～？）。長野県埴科郡（はにしなぐん）（現長野県千曲市）生まれ。1890 年成城学校入学するが軍人を志望する。陸軍幼年学校、士官学校の受験に失敗。荒尾精のもとで中国語などを学び、1895 年陸軍通訳として台湾に渡る。翌年辞職し詠帰舎（後の善隣書院）で中国語を再度学び、1897 年中国に渡って白岩龍平のもとで働き、後に四川省に入り実業家として活躍した。満洲事変後は日本に引き揚げた。1941 年時点は存命。（財団法人東亜同文会内対支功労者伝記編纂会代表中島真雄『続対支回顧録』下巻、大日本教化図書、1941 年、400～407 頁参照。）

のようにある。

［明治］二十七年［1894］日清戦争が起り、君は只管戦地行を熱望したものゝ、其方法なく悶々として居る折柄、京都に居る荒尾精門下の井上雅二より、当地に来いとの手紙に接したのである。元井上は海軍機関学校を半途退学し京都に閑居せる荒尾の門下生となつたのであるが、同門には木下国明、大原信[16]、曽根原千代三[17]、遠藤留吉[18]、牧山某等が居り、毎日荒尾門下の支那通から支那語の教授を受けてゐた。よつて君は勇躍京都に走り、荒尾の門下生となつて支那語の練習を始めたが、日清間の媾和条約成立すると、白岩龍平[19]も戦地を引揚げて帰り、支那語の教授に加勢したので長足の進歩を見る事となつた。[20]

荒尾は日清貿易研究所の元所長、白岩はその元学生である。直前まで日清貿易研究所にいた彼らが中国語を教えるに際して、そこで使われていた御幡雅文『華語跬歩』日清貿易商会蔵版を流用することは想像するに難くない。

この荒尾門下生については、『続対支回顧録』の井上雅二の解説に次のように述べられている。

［明治］二十八年［1895］二月［井上雅二は］東都遊学の途に上り途中京都に立ち寄り〈略〉若王寺（ママ）山中に隠棲して東亜の大局を静観せる荒尾精の門を叩いた。……この一夕の会談は、絶大の感銘を君に与へて、［井上雅二］君の一生を支配する影響をも齎らした。

〈略〉

［荒尾が言うに］君は之から東京に出て、政治経済の学問をすると云ふ事であるが、夫れは後でもよいではないか

〈略〉

斯くて［井上雅二］君は、遽かに上京の予定を変更し荒尾の許に留り、各方面から同志を糾合し、附近に一戸を構へて之を東方斎別院と称し、荒尾に師事して、支那語及び経書を学びお互いに切磋琢磨しつゝ自炊生活を営んだのである。斯くの如くして［井上雅二］君は荒尾の許に在る八ヶ月、同年十月その斡旋により陸軍通訳として台湾に渡り総督府附を命ぜられ[21]

これによれば、荒尾の私塾は「東方斎別院」と言い、京都の若王子（にゃくおうじ）にあった。現在、京都府京都市左京区若王子町の熊野若王子神社前に荒尾を記念する石碑があるが、彼の自宅や私塾もその周辺にあったのであろう。

国立国会図書館憲政資料室所蔵「井上雅二関係文書（MF：東京大学近代日本法政史料センター蔵）」中の井上雅二の手記『明治廿八年洛東鹿ケ谷旧記事全』[22]には、2月4日に「初めて荒尾精先生に見ゆ」とある。

その後、「鹿ヶ谷化物屋敷」という小見出しをつけて4月5日に「家ヲ鹿ヶ谷ニ得テ」とあるから、東京行きを止め、腰を据えて荒尾に師事するための京都での滞在場所として「化物屋敷」のような家を借りたのであろう。

さらに5月のこととして「大原信宮坂九

---

16 大原信（1878〜1911）。長野県松本市に生まれる。京都に荒尾精をたずね学び、後に宮島大八のもとで中国語を学んだ。東亜同文書院卒業。1904年北京警務学堂教習、後に奉天軍政署嘱託、1908年東亜同文書院教員、後に三菱商事会社上海支店に入る。（前掲『対支回顧録』下巻、1018〜1020頁参照。）

17 曽根原千代三（1876〜1909）。長野県安曇野郡大町村生まれ。荒尾精のもとで中国語を学び1896年陸軍通訳として台湾に渡る。1899年東亜同文会派遣留学生として渡清。東亜同文書院では事務員と中国語教員を兼ねた。1903年四川省に入り宮坂九郎とともに実業家として活躍した。（前掲『対支回顧録』下巻、1012〜1013頁参照。）

18 遠藤留吉。生没年不詳。宮坂九郎の援助を得て大阪で日中貿易の事業を営んだ。（前掲『続対支回顧録』下巻、405頁参照。）

19 白岩龍平（1870〜1942）。美作国吉野郡讃甘村宮本（現岡山県美作市）生まれ。日清貿易研究所で学ぶ。日清戦争時は清国内で諜報活動に従事。戦後、渡清し大東汽船、湖南汽船、日清汽船を経営した。1920年東亜同文会理事長代理（1922年同幹事長）として同会の運営の実務を担った。（前掲『続対支回顧録』下巻、338〜351頁参照。）

20 前掲『続対支回顧録』下巻、401頁。［　］内は引用者。

21 同616〜617頁。［　］内は引用者。

22 国立国会図書館憲政資料室所蔵「井上雅二関係文書（MF：東京大学近代日本法制史料センター蔵）」、マイクロフィルム第1リール。

郎来リ」とあり、前掲の『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版に名を記していた人物である宮坂が来たことが確認できる。

同じ月には「化物屋敷ヲ出デ若王山中延年台ニ移ル」とも記している。「若王山中延年台」とは、荒尾が住んでいた若王子近くの「延年台」ということなのだろう。「延年台」についてはよくわからないが、宗方小太郎[23]の1895年（明治28）9月14日の日記に登場している。

> 九月十四日　晴。田鍋の処に中食し，共に出て荒尾精を訪ひ小談。出て若王子の延年台に遊び，転じて南禅寺，知恩院を一覧し帰る。晩田鍋，白岩，金嶋三子と小飲。荒尾氏の書生三人来り予の対清意見を敲く。[24]

ここに荒尾の書生というのが出てくるが、別の日付の日記にも姿をあらわしている。

> 九月十一日　下午荒尾養成中の書生三人来訪。[25]

これらはちょうど井上や宮坂が若王子にいた時期のことであり、書生とは井上や宮坂といった荒尾門下生のことであろう。

このように1895年（明治28）中頃から本格的にはじまった荒尾の私塾だが、同年末には活動を停止したようである。

前掲「井上雅二関係文書」中の井上の別の手記『台湾漫遊日記』[26]の1895年（明治28）11月4日に「台湾行ニ決ス総督府附ヲ命ゼラル」とあり、同年11月18日には広島から乗船して台湾へ向かったことが記されている。また、同年12月には宮坂が、翌年には曽根原もともに陸軍通訳として台湾に渡った。さらに荒尾自身も1896年（明治29）1月7日に上海に渡ると[27]、同年10月台湾で急死するまで多忙であった。このように1895年（明治28）末までに京都の私塾の実体はなくなっている。

短期間だけ存在していた荒尾の私塾の学習とはどのようなものであったのだろうか。

やはり中国語には力がいれられていたようである。

井上雅二は前掲『明治廿八年洛東鹿ケ谷旧記事全』で、1895年（明治28）6月の出来事の中に「学業課程」という小見出しをつけて「清語、国際法、歴史、経学」と記している。「清語」は清国の言語、つまり中国語のことである。

先に引用した『続対支回顧録』井上雅二の解説には「支那語及び経学」を学び、途中からは白岩龍平から中国語を学んだとあった。

前掲の宗方小太郎の日記から、白岩は1895年（明治28）の3月は広島におり、その後いつ入京したのかはわからないものの同年9月から10月末までの間は京都に滞在していたことが確認できる[28]。この期間は彼が中国語を教えたのであろう。

では白岩がいない期間はどうしていたのだろうか。

中国語の教授について荒尾は井上に次のように語ったという。

> 幸に高橋健三、頭山満、佐々友房等と相談して、目下興亜学院と云ふものを自分の膝元に設けたいと思つて居る処

---

[23] 宗方小太郎（むなかた・こたろう　1864〜1923）。肥後宇土出身。済々黌に学び、1884年上海の東洋学館に入り、その後中国各地を遊学し、荒尾精のもとで調査活動にも従事した。1890年日清貿易研究所設立に参加。1898年東亜同文会設立に参加。1914年上海で東方通信社を設立。（前掲『対支回顧録』下巻、360〜403頁参照。）

[24] 大里浩秋編「宗方小太郎日記、明治26〜29年」『人文学研究報』第41号、神奈川大学、2008年3月、80頁。下線は引用者。下線は引用者。

[25] 大里、前掲文、80頁。下線は引用者。

[26] 前掲「井上雅二関係文書」、マイクロフィルム第1リール。

[27] 宗方小太郎は1896年1月7日付け日記に「荒尾精来滬。」（「滬」は上海の別称。）と記している。（大里、前掲文、89頁。）

[28] 宗方小太郎の1895年中の日記に、「三月十三日…広島白岩、三沢列及び寺嶋、太田、宇田等に発信す。」（大里、前掲文、76頁。）、「九月一日…京都滞在。午前田鍋安之助、白岩龍平来訪。」（同79頁。）、「十月四日…京都白岩、田鍋に発信。」（同82頁。）、「十月二十日　晴。日曜日。…白岩龍平京朝よりの信到る。」（同82頁。）、「十月三十一日…。白岩龍平神戸より信到る。新開港場祝宴の為め清国に赴くと云ふ。」（同83頁。）、「十一月初一日…家大人の信及び白岩龍平、小濱為五郎の信到る。白岩龍平に長崎に発信す。」（同82頁）、「十二月十五日…漢口白岩龍平…寄するの信を認む。」（同86頁。）とあることから、白岩は1895年9月から10月末までは京都に滞在していたことがわかる。

だ、支那語は自分が教へ、経済学は伴直之助に頼むつもりであるから、君も同志となつて貰ひたい。[29]

興亜学院が実現した形跡はないが、私塾はこの構想の直後のことであり、白岩が入京する以前は荒尾が中国語を教えた可能性もある。

井上雅二が 1895 年（明治 28）の日記[30]にも中国語学習についての記述がある。次に該当箇所だけを抜き書きする。

五月三十一日　夕方支那語
六月六日　午前就寝　午後読書　夕方ヨリ支那語研究
六月七日　夕月支那語ヲヤル徹夜
六月八日　午前就寝　午后読書　夕方支那語ヲヤル
六月十一日　夕方支那語ヤル　十二時就寝
六月十四日　午前支那語
六月十五日　午前支那語
六月十八日　支那語日中終日練□
六月十九日　午前支那語
六月二十八日　午前支那語
七月十一日　午前支那語
七月十二日　午前支那語
八月十五日　支那語　新欧史ヲ読ム
八月十七日　国際法　支那語
八月十九日　支那語
八月二十一日　課程　支那語　新欧史午前
八月二十二日　課程　支那語　新欧史
八月二十三日　課業　新欧史百枚　支那語□□
八月二十六日　課程　午前　支那語
八月二十八日　新欧史六十葉　支那語支那時事四十葉
八月三十日　午前支那語　新欧史四十葉
九月六日　支那語
九月八日　支那語復習
九月九日　支那語復習
九月十六日　支那語
九月十八日　支那語
九月二十日　支那語
九月二十四日　支那語復習

井上の 1895 年（明治 28）の日記は、2 月中旬から 5 月末までと 10 月 7 日以降の記述がなく、9 月 25 日から 10 月 5 日までは「〇」と記されているだけであり、全部で半年間ほどしかつけられていない。くわえて筆者では判読できない箇所も多い。それでも上記のように中国語の学習についての多くの記述を確認することができ、中国語学習に重きをおいていた様子がわかる。

また前掲『明治廿八年洛東鹿ケ谷旧記事全』は 10 月の出来事の中に「清語研究昼夜ヲ分タズ」と記しており、やはり、かなり熱心に中国語を学んでいたようである。

日清貿易研究所で学んだなかには日清戦争や台湾で陸軍の通訳となっている者がいるが、荒尾の私塾で学んだ井上も上掲のように荒尾の紹介で台湾の陸軍通訳となっている。ほかに宮坂、曽根原も台湾で陸軍通訳となっているが、これにも荒尾の推薦があったのであろう。

荒尾自身が陸軍軍人であったこと、日清貿易研究所、京都の私塾に学んだ者も陸軍通訳として活動したということだけをみるならば、二つの荒尾の学校は中国への関心を強める軍部の外郭的な組織と位置づけることもできなくもない。

しかし、そういった捉え方は正確ではないでないだろう。

日清貿易研究所卒業生が通訳として中国との戦争に関係することについて、荒尾とともに日清貿易研究所を運営し、後に東亜同文書院院長となった根津一[31]は次のように述べている。

当時条約改正問題盛ナリシ頃ナレバ〈略〉而シテ文明流ノ戦ヲナスニハ通訳ヲ精選シ良ク敵状ヲ探リ、又言語ヨリ生ズル一般ノ誤解ヲ避ケ殊ニ無辜ノ良民ト衝突ヲ避ケザルベカラズ〈略〉

[29] 前掲『続対支回顧録』下巻、617 頁。
[30] 前掲「井上雅二関係文書」、マイクロフィルム第 1 リール。
[31] 根津一（ねづ・はじめ　1860～1927）。甲斐山梨郡出身。陸軍軍人、教育者。山洲と号す。陸軍教導団、陸軍士官学校（旧 4 期）。広島鎮台を経て陸軍大学校に入るが教官メッケル少佐と衝突し退学。参謀本部勤務を経て予備役となり荒尾精の日清貿易研究所運営に参加、『清国通商綜覧』を執筆。後、東亜同文会幹事長、東亜同文書院院長として活躍した。（前掲『対支回顧録』下巻、554～561 頁参照。）

川上参謀長夙ニ之ヲ憂ヒ通訳生ヲ研究所卒業生ニ求メ来レリ〈略〉即チ参謀本部ト交渉シ研究所出身者ニハ特別ノ徽章ヲ附シ一見研究所出身ナルコトヲ明カニシ以テ任務ニ従事スルコトトナレリ[32]

条約改正も意識し国際的に認められる国家として振る舞うためには中国人と正確なコミュニケーションをとることができる知識、能力が必要であり、それができるのが日清貿易研究所出身者だというのである。つまり軍へ協力することが一義的であるような教育活動ではなかったということである。前掲したように荒尾の私塾で国際法が教授されていたのも、こういった国際社会への意識が基底にあったのではないだろうか。また、従軍に際して日清貿易研究所出身者とわかるように目印をつくり身につけていた点なども自らと軍を峻別する意識のあらわれである。

さらに日清貿易研究所や荒尾の私塾で学び陸軍通訳となった者が軍やそれに近い機関に留まることなく商いの世界に身を投じていることからも、軍関連の活動を第一に置いていなかったことがみてとれる。

日清貿易研究所でいえば、華南では白岩龍平、華北や東北では向野堅一[33]が実業家として活躍している。教員であった御幡雅文もまた陸軍省派遣で清国留学をして陸軍通訳官となるなど軍に縁がある人物であるが、最後は三井物産会社上海支店勤務を選んでいる。

京都の荒尾の私塾に学び台湾で陸軍通訳となった宮坂、曽根原も間もなく軍を辞して再度中国語を学び直した後に実業界に入っている。同じく軍で通訳となった井上は会社を興して商売をするという方法はとらなかったものの南方の開拓や日本人の海外移民事業に従事した。大原は軍の通訳にはならなかったが東亜同文書院の教員となったものの、「平生の蘊蓄を傾け荒尾根津の志を実現せんとした[34]」として三菱商事会社の上海支店に転じている。彼が思う荒尾の志とは通商に携わることだったのである。これは他の門下生にもいえることであろう。

前述したように、御幡雅文『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版は、これが使われた日清貿易研究所の商業重視の姿勢をあらわすように、他の版の『華語跬歩』にはない商売のやりとりに特化した「商賈問答」が収められていた。これに学んだ学生たちが実際にその分野での活動を強く意識していたことは、教材である御幡雅文『華語跬歩』日清貿易商会蔵版だけでなく日清貿易研究所や荒尾の京都での私塾の性格を示すものである。

3. 井手三郎手写『華語跬歩　東中問答』

井手三郎文庫が所蔵する一冊の和装本である。「香雪書屋東」と印された用紙に毛筆で書かれている。

巻末には「明治三十二年六月廿五日　上海美租界武昌路仁徳里ニ於テ寫完　井手」とある。井手三郎自身によって1899年（明治32）に上海で写されたものであるとみられる。

その構成は次のようである。

東中問答（34丁）
常言類（11丁）

書名にあげられた「東中問答」の他に「常言類」も写されている。

朱書き圏点を漢字四隅に附けて声調をあらわしているが、無気音と有気音の区別は示していない。句読点はなく、文の区切りには一字分をあけている。

「東中問答」という名称は、本書以外では瓊浦揮肅未乏稿『華語跬歩　全』にしかみられないものである。全文を対照したわけではないが、ともに36章よりなっており、瓊浦揮肅未乏稿『華語跬歩　全』を手写したものであるとみられる。

一説によれば「東中問答」は、御幡雅文

32 松岡恭一、山口昇一編『沿革史』東亜同文書院学友会、1908年6月、上編27〜28頁。

33 向野堅一（こうの・けんいち　1868〜1931）。筑前直方鞍手郡新入村（現福岡県直方市）出身。日清貿易研究所卒業。日清戦争では陸軍通訳官となり清国内で諜報活動を行う。1896年軍を辞すと北京に筑紫弁館を開店、日露戦争後は奉天に移り茂林洋行を開くなど、華北、東北の実業界で活躍した。奉天商業会議所副議長、正隆銀行取締役、瀋陽建物会社専務取締役。（前掲『対支回顧録』下巻、601〜618頁参照。）

34 前掲『対支回顧録』下巻、1019頁。

『華語跬歩　上編』日清貿易商会蔵版では内容はそのままに「家常問答」と改題され収録されたという[35]。

御幡雅文『華語跬歩』日清貿易商会蔵版、井手三郎手写『華語跬歩　東中問答』についで刊行された柏原文太郎編輯『華語跬歩全』東亜同文会蔵版にも「家常問答」が収録されている。これもやはり、それ以前の版と同じく全36章よりなっている。井手三郎手写『華語跬歩　東中問答』末尾の「那実在不敢當了」が柏原編輯本では「那實在不敢了、」になっているという字句の異同もみられるものの内容はほぼ同じものである。

これらのことから瓊浦揮肅未乏稿『華語跬歩　全』の「東中問答」に若干手直しをして「家常問答」と改題し、またいくつかの内容を増補したものが御幡雅文『華語跬歩　上編』日清貿易商会蔵版であり、これを種本に刊行されたのが柏原文太郎編輯『華語跬歩　全』東亜同文会蔵版だと考えられる。

さて、井手はすでに1887年（明治20）に上海に渡り、漢口、北京、天津各地を1890年（明治23）にかけて遊学し、一定の中国語の能力があったと思われる。その彼がなぜ1899年（明治32）の段階でわざわざ御幡の教科書を書き写したのだろうか。

彼の経歴からしてきちんと中国語を学んでいなかったためということもあるかもしれない。しかし、それよりも彼が写したのが「東中問答」と「常言類」であるという点に注目したい。

井手は瓊浦揮肅未乏稿『華語跬歩　全』のすべてを書き写したわけでない。発音や単語集、語句集の部分は写していない。彼が写したのは、日常会話の例文集である「東中問答」、ことわざを集めた「常言類」だけである。

中国で3年間生活をし、少なくとも旅行ができる程度の中国語の力をもっていた井手にとって発音や単語は写すまでもないことであったのかもしれない。しかし、中国語教育に豊富な経験をもつ御幡が精錬した例文は、日清貿易研究所や東亜同文書院といった中国語重視の学校で中国語を学んだことがなかった彼にとっては学ぶべき内容であったのであろう。

彼が、瓊浦揮肅未乏稿『華語跬歩　全』の収録順では「常言類」「東中問答」であるにもかかわらず、まず日常会話例文集である「東中問答」を、次いでことわざ集の「常言類」と原本とは逆の順番で書き写していることに注目すれば、手写当時、上海に滞在していた彼にとってそこに収録されている日常表現がもっとも参考になると考え、まず「東中問答」を写したのではないだろうか。

日常会話の重要性はいうまでもないが、ことわざを集めた「常言類」も重視して書き写したことはややわかりにくいかもしれない。

「常言類」とはどのようなものなのか。他の版の『華語跬歩』も「常言類」はすべて次の一文からはじまっている。

那個人黑麻子要娶美貌妻這叫癩蝦蟆想食天鵝肉

（黒あばたの輩が美しい妻を娶りたいということを、イボガエルが白鳥の肉を食べたがる、と言う）

このように前半で状況の説明をし、後半でその慣用的な言い回しをあげる。

後に東亜同文書院の現役学生が『北京官話常言用例』[36]という「常言」のみを収録した教材を出しているが、この著者は「常言」とは「説話を華麗にし明亮にし且其意義を強からしむる[37]」ものだと説明しており、当時、中国語で意思の疎通をはかる際に「常言」は欠かせないものととらえられていたようである。

「常言」を『華語跬歩』に収録した御幡もそうした考えをもっていたということだろうし、書き写した井手もまた自らの中国語力の上達のイメージとして「常言」を自在に操ることを抱いていたからこそ、わざわざ手写してこれを学んだのであろう。

おわりに

『華語跬歩』と冠する書は一つではなく、さまざまな版がある。東亜同文書院で教科

35 鱒沢、前掲「御幡雅文伝考」、42頁。

36 小路真平、茂木一郎『北京官話常言用例』文求堂書店、1905年。

37 同3頁。

書として使われる以前にすでに存在していた。

そのうち次ぎにあげる三点が東京大学法学部附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫井手三郎文庫に所蔵されていることを確認した。

① 瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』
② 御幡雅文『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版
③ 井手三郎手写『華語跬歩　東中問答』

瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』の目次には「附華語跬歩音集」と印字されているものの、井手三郎文庫所蔵本には附録されていない。しかし、御幡雅文混纂『華語跬歩音集』なる書が古書として流通していた事実があり、おそらくこれが「附華語跬歩音集」のことだと思われる。これらはカナで中国音をあらわしており、御幡雅文は教材をつくりはじめた当初から、独学にも使うことができるものを目指していたことをうかがいしることができる。

御幡雅文『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版については、実見した結果、これが日清貿易研究所のために編まれたことや、あきらかに入門以上の比較的難しい内容だけを収録しており、先行研究で説明されていたような『上編』の増訂版でないことがわかった。

御幡雅文『華語跬歩　上編』日清貿易商会蔵版については、一巻本である柏原文太郎編輯『華語跬歩　全』東亜同文会蔵版の目次に意味をなさい「上編」という語が印字されていること、くわえてこれの内容が発音や単語集をはじめ御幡雅文『華語跬歩下編』日清貿易商会蔵版とくらべて易しく文字通り『上編』にふさわしいことから、柏原文太郎編輯『華語跬歩　全』東亜同文会蔵版と御幡雅文『華語跬歩　上編』日清貿易商会蔵版は同じ内容のものだと考えられる。

御幡雅文『華語跬歩　下編』日清貿易商会蔵版は非売品であり、関係者以外の手に入るものではないにもかかわらず、井手三郎文庫所蔵本には日清貿易研究所と直接の関係がない宮坂九郎の署名が残されていた。

彼は日清貿易研究所所長荒尾精が研究所を閉じた後に京都で開いた私塾で学んでいた人物である。そこでは日清貿易研究所卒業生白岩龍平などによって中国語が教えられていた。時期が日清貿易研究所閉鎖の直後であることからそこでの教材は研究所のものを流用したと考えられ、井出三郎文庫所蔵本は宮坂がここで用いていたものだとみられる。

日清貿易研究所のために編まれた御幡雅文『華語跬歩』日清貿易商会蔵版は荒尾の京都の私塾でも使われていたのである。

また、さまざまな『華語跬歩』の版のなかで唯一「商賣問答」という商務に特化した内容を日清貿易商会蔵版が収録していたこと、これに学んだ日清貿易研究所、京都の私塾の人々が、一度は軍務や教育などの職についたとしても結局は商業関連の分野を目指したことなどから、荒尾の教育のねらいが日本の通商を担う国際的な人材養成であったことをうかがいしることができる。

井手三郎手写『華語跬歩　東中問答』は、刊行された『華語跬歩』の中では瓊浦揮肅未定稿『華語跬歩　全』にしか含まれない「東中問答」が収録されていることから、これを書き写したものであることがわかる。

井手は体系的な中国語教育はうけていないと思われるが、1887 年（明治 20）に上海に渡った後、中国を踏査した経験をもっている。一定の語学力はもっていたと思われる彼がわざわざ書き写したということ自体が『華語跬歩』の実地での有用性を示しているだろう。また日常会話の例文集「東中問答」だけではなく、ことわざを集めた「常言」も写しているが、これは『華語跬歩』を著した御幡が「常言」を使いこなせることが流暢な中国語であるという考えをもっていたことをうかがわせるものである。

文中、引用に際して日本語資料は旧字体を新字体に改めた。

本稿は、平成 24 年度科研費（奨励研究「東亜同文書院で使用された中国語教材の研究」）の助成をうけた研究の成果の一部である。

『華語跬歩』版本一覧

出版時期	著者、編者	題名	出版	版	版次	備考	参考本所蔵先
1886夏 （明治19）	瓊浦揮肅	未定稿 華語跬歩　全				和装本	井手三郎文庫
？	御幡雅文混纂	華語跬歩音集				和装本	未見。
1890年8月 （明治23）	御幡雅文	華語跬歩　上編		日清貿易商会蔵版			未見。
1891年 （明治24）	御幡雅文	華語跬歩　下編		日清貿易商会蔵版		和装本 非売品	井手三郎文庫
1899年 （明治32）	井手三郎手写	華語跬歩 東中問答				和装本	井手三郎文庫
1901年7月10日 （明治34）	柏原文太郎編輯	華語跬歩　全		東亜同文会蔵版		和装本 非売品	国会図書館 愛知大学
1903年10月1日 （明治36）	御幡雅文	華語跬歩　全	文求堂書店	東亜同文会蔵版	初版	和装本 市販	国会図書館 愛知大学
1905年8月5日 （明治38）	御幡雅文	華語跬歩　全	文求堂書店？	東亜同文会蔵版	再版		未見。
1906年6月1日 （明治39）	御幡雅文	華語跬歩　全	文求堂書店	東亜同文会蔵版	第3版	和装本 市販	北九州市中央図書館
1907年2月15日 （明治40）	御幡雅文	華語跬歩　全	文求堂書店？	東亜同文会蔵版	第4版		未見。
1907年5月20日 （明治40）	御幡雅文	華語跬歩　全	文求堂書店？	東亜同文会蔵版	第5版		未見。
1908年1月1日 （明治41）	御幡雅文	華語跬歩全	文求堂書店？	東亜同文会蔵版	第6版		未見。
1908年9月5日 （明治41）	御幡雅文	増補華語跬歩	文求堂書局	東亜同文会蔵版	第7版	洋装本 市販	国会図書館
1910年1月10日 （明治43）	御幡雅文	増補華語跬歩	文求堂書局	東亜同文会蔵版	第8版	洋装本 市販	井手三郎文庫
1911年4月25日 （明治44）	御幡雅文	増補華語跬歩	文求堂書局	東亜同文会蔵版	第9版	洋装本 市販	井手三郎文庫
1913年5月20日 （大正2）	御幡雅文	増補華語跬歩	文求堂書店？	東亜同文会蔵版	第10版		未見。
1915年4月25日 （大正4）	御幡雅文	増補華語跬歩	文求堂書店	東亜同文会蔵版	第11版	洋装本	愛知大学
1917年5月1日 （大正6）	御幡雅文	増補華語跬歩	文求堂書店	東亜同文会蔵版	第12版	洋装本	個人
1920年6月1日 （大正9）	御幡雅文	増補華語跬歩	文求堂書店	東亜同文会蔵版	第13版	洋装本	個人